

『サントスの御作業』におけるモノナリ文のモダリティ性

—近世語資料との比較対照を中心に—

お茶の水女子大学大学院生

小 野 舞 子

本発表は、近世初期に成立した文語体ローマ字表記キリシタン資料『サントスの御作業』において顕著に確認される文末表現「モノナリ」が有するモダリティ性について、近世期における日本語非キリシタン資料との比較という観点から得られた考察を報告するものである。

古典語の「モノナリ」という句において、助動詞「ナリ」が断定辞の機能を有していることを前提とするならば、同資料に見られるモノナリ終止文も現代語における「モノダ」文的に解釈することが自然である。しかしながら『サントスの御作業』におけるモノナリ文には現代語「モノダ」の持つ意味機能を以て解釈することの難しい例が多く、むしろ用例の大半に現代語「ノダ」文に近い機能、特に「原因・理由説明」のノダ的な機能が、知識を表明する手段として用いられていることが認められる。また、こうした「ノダ文的なモノナリ(口語体モノジャ)」は『サントスの御作業』という一資料にのみ出現が限られているのではなく、同資料以外の国内キリシタン資料、或はキリスト教・宣教師の関与しない同時代期の日本語資料(「非キリシタン資料」)にもその存在を確認できる。

本発表では上記を前提とした上で、以下二つの視点からノダ的な機能を持つ「モノナリ」「モノジャ」について検討を進めていく。

第一に、近世初中期に成立した非キリシタン資料である虎明本狂言や仮名草子作品、浮世草子作品を比較対象に設定した上で、モダリティ性の差異という視点から検討する。『サントスの御作業』のノダ的な「モノナリ」は殆どのケースで読者に対する「知識表明・説明」のモダリティとして用いられていたが、他資料では特に狂言資料を中心に、現在の状況から物事を推量して理由づけ、事象の判断に繋げる「判断のモダリティ」に相当する「モノナリ」「モノジャ」を多く確認することが出来る。これには『サントスの御作業』は語り手のいない文語体資料であり、会話文主体ではないというそもそもの性質の違いが大きいことが考慮されるものの、近世初期の時点ではこれらのノダ的な「モノナリ」「モノジャ」が単なる「モノナリ」の範疇を超え、ある程度柔軟なモダリティ性を有していたとの考察が可能である。

第二に、『サントスの御作業』より後の時代に成立し、かつ性質的に類似している資料との比較という視点から、近世中期及び後期に成立した心学道話資料に見られる「モノナリ」「モノジャ」についても検討を行う。調査の結果、近世中期資料においてはノダ的な「モノナリ」をごく少数の例確認したが、近世後期資料では理由説明の形式として準体助詞「ノ」を用いた文末表現「ノジャ」の使用が定着していたことで、「モノナリ」「モノジャ」は現代語モノダ的な機能を示すに留まっていると言えた。他方、近世後期資料では中期以前には見られなかった「希望のモノダ」に相当する「モノジャ」の例を確認できた。この点について本発表では「モノナリ」「モノジャ」における説明・判断のモダリティ性は「ノジャ(ノダ)」の定着によって次第に衰退したと考えられる一方で、現代語「モノダ」に通ずる意味機能の拡大がこの時期に生じていたという可能性を指摘する。